

ク ル ザ ー ド 考

床 次 正 安 (鉱物学教室)

は じ め に

「ブラジル, Poços de Caldas における稀土類鉱物の調査研究—稀土類元素・放射性元素の鉱物化学的挙動と放射性廃棄物固定に関する研究」という課題で今年度の科学研究費補助金(海外学術研究)を頂戴して、北半球の夏休みをブラジルで過ごしました。調べた限りの事項は論文にして学術雑誌に投稿したいので、うろ覚えで書ける題材を選んで記します。

研究対象が特殊な岩石に伴う鉱物の挙動ですので、広いブラジルの中のごく狭い範囲、サンパウロ州とミナスジェライス州の境界付近だけしか歩いていないのですが、その辺りの豊かな鉱工業や農業生産を見て、世界でも最も富裕な地域であるとの印象を受けました。この印象とブラジルが債務超過国であるという事実の認識との間にかなりのギャップがあるので、その溝を埋めるべく考えたのがこの稿です。

物 貨 騰 貴

10年ぶりにサンパウロに着いて驚いたことは米

ドルの購買力が変わっていないことでした。中南米諸国の通貨は弱く、年率百分のインフレが珍しくないことは御承知と思います。その中では、ブラジルは比較的落ち着いていて、1960年代前半と1985年を除けば過去20年程度を平均して年率4~5割程度の物価上昇に過ぎません。それでも、1968年に3桁のデノミネーションを行い、また昨年2月には1,000クルゼイロを1クルザードに呼び変えました。第1次世界大戦後のドイツの悪性インフレ時代には、高額紙幣の流通は優れた頭脳を有するドイツ国民でもなければ無理だと思われた由ですが、現今の中南米では普通の事象になっています。ブラジル人も百万単位の計算を平気でしています。そればかりか、通貨の呼称変更後も市中で流通している0が沢山並んだ旧紙幣と、数字が3桁少なくなった新紙幣とを苦もなく混用しています。

さて、米ドルの価値は長期間安定している訳ですが、細かいことを言えば、最近ドル安傾向にあることを指摘できます。実は、ドルとクルザー

ド（またはクルゼイロ）の換算には、公定のレート以外に平行ドルと呼ばれるものがあります。平行ドルは、闇ドルとは少々違います。第一に、闇ドルは使用すれば処罰される筈のものです。平行ドルはそのような心配がありません。実際、新聞紙上に両方のレートが掲載されます。私共の科研費は平行ドルで換算し、経理報告にもその通り記載し、添付の証拠書類も銀行や公的金融機関のそれではなく個人業者の受取の提出で済ませました。第二に、東欧圏などで闇ドルが流通するならばそのレートは公定レートの3倍以上なのが普通でしょう。ところが、ブラジルの平行ドルは、公定のそれとたいして違いません。10年前で170%程度でした。それが、今回は120%程度です。上で安定している米ドルの価値と書いたのは平行ドルの価値であり、ドル安傾向と書いたのは公定ドルのことで、国家としてのアメリカの威信がそれだけ低下しているのでしょう。米ドル（もちろん平行ドル）の使用者にとっては、アメリカ本国でも少しづつインフレが進行しドルの購買力が漸減していることを考えれば、ブラジルでの生活が割得になっていると思います。日本円を米ドルに換えて持ち込んだときの購買力は、円高の分だけさらに得する勘定です。

ブラジル人にとっての物価はどうでしょうか。市民感情としては、勿論物価騰貴に満足している人は居ないでしょう。実際、資産を北米に移し、身体はサンパウロで遊んで暮している「成功者？」が散見されますが、このような旨い話に乗れない大多数にとっては面白くないでしょう。しかし、連邦政府の政策として消費者物価も賃金も政府指定の指数に従って変化させる方法（インデクセーション）をデノミネーション以来長期にわたって採用し続けているので、個々の人間の収支は物価が安定している場合と同様であるということになっています。クルザード（あるいはクルゼイロ）で勘定すればインフレだが、実質は米ドルにリンクしていて「物価騰貴」の影響が無いというお話です。

元来、悪性インフレは経済が破綻したときに起きるはずで、クルザード（あるいはクルゼイロ）の切下げ率から見ると明らかに悪性インフレと言えます。一方、インデクセーションが可能ということは経済現象を政府が制御し得るということの意味します。これは矛盾した話です。第一、ポンドやフランやリラなどのようにそれぞれが独立した経済圏を有している通貨が弱くなった場合に、強い通貨とのレートを切下げるという行為ならやむを得ませんが、指数化できるほどに全面的にドルに寄生している通貨の切下げなど無意味でしょう。指数化できるくらいなら切下げなくとも経済を維持できるはずで、

矛盾などを見出せないと言うことは容易です。インデクセーションが正しく機能したことは無いのだと言い切ってしまうればそれまでです。実際、昨年の通貨の呼称変更は単に通貨の桁数が増えたから実施したわけでは有りません。本当にインフレが昂進したので経済を安定させるべく強力なくつかの施策を組合わせたものの一つとして行ったものです。だから、一時的には経済が制御し難くなったことは確かです。しかし、長期的なブラジル経済は充分安定して居り、インデクセーションはそれなりに機能しているものと思います。つまり、政策次第では通貨の価値を一定に保つことができるにもかかわらず、意図的に通貨の継続的な切下げが行なわれているものと思います。これが最初に挙げた問題の、ブラジルをいつまでも債務超過国たらしめている手品の種だと思えます。

州 と 連 邦

ブラジルという国は、他の南米諸国と全く異質です。他の諸国の言語がスペイン語なのに、ブラジルだけがポルトガル語であることは御存知でしょう。多くの国の中の一つの国に見えますが、実は南米大陸の半分を占めている大きな連邦です。スペイン系の文化は血の気が多くてすぐに喧嘩をするらしく立場の違う地方ごとにそれぞれ独立した国を作ってしまったのに、ポルトガル系は温和

なので立場の違う地方も州の地位で満足しているのです。

サッカーやサンバに懸ける情熱の強さではスペイン系に劣ることは無いかも知れませんが、ポルトガル系が温和なことはいろいろな面に現われています。南米諸国では、革命やクーデターが頻繁に起っていますが、スペイン系の国では負けた方は国外に逃げない限り生命も危ないが、ブラジルでは、殺される心配がないそうです。因みに、イベリア半島の本国でも、スペインでは牛を闘牛士が殺してしましますが、ポルトガルではとどめを刺すことがないそうです。

本論に戻りますと、債務超過国である理由の一つにブラジルが連邦であることが挙げられます。南回帰線付近に立地するサンパウロ州やミナスジェライス州は富裕な先進国というべきですが、赤道付近を占める広大な北部諸州は貧乏な発展途上国に位置付けるより他は無いです。折角の富裕な南部諸州も北部諸州に引きずられて貧乏国の仲間入りをしているという解釈が成立します。

北部諸州の影響力は次の機構で説明されています。南部では、民度も高く教育も行き届いて居り、行政面も民主的であり、有能な人材が実業等に従事します。一方、北部では富の偏在が著しく、裕福な人だけが高等教育を受けて官僚や高級軍人になります。連邦政府を動かすのは、そのような北部のエリートです。彼等は観念の上では、社会政策を重視しています。サンパウロ等でも公共の費用は極めて低廉で、地下鉄やバスの代金は只同様です。だから、南部の富を回収して北部に投入することも富の平準化という美名のもとに、極めて積極的です。

平準化の理念は良いのですが、投入された費用が次の生産に役立つように使われなければ、ざるに水を汲むようなものです。北部では、殖産を励行せず、国民の階層や貧富の較差を固定するようにエリートが頑張っているようです。仮に、日本中の富を新潟三区に注ぎ込んだところでたかが知れていますが、日本と同じくらいのサンパウロ州

などがいくら富んでいても、その何倍もあるところに投入したのでは何時までもうだつが上がらないのだという説明を聞きました。

以上のようなブラジルの政情については短期間の滞在者が判定し得るものではありませんが、若干の真実は含まれていると思います。しかし、この説明では不十分です。北部諸州という荷物を背負ったところで、精々中進国になるくらいで、債務超過の後進国まで下落するには余りに南部が豊か過ぎます。何かもう一つの機構を探さる必要がありそうです。

過剰投資

サンパウロの地下鉄は現在のところ南北線が約15軒、東西線の開業部分もその位ですが、発車するやいなや最高速度まで加速し、次の駅の手前で一旦減速し、やがて停車する手筈は、全部中央から制御しているようで、見事なものです。駅は深く、エスカレーターなどの施設が整備されています。極めて安く設定された運賃では、これらの経費のごく一部を賄うに過ぎず、開業に到る費用の回収などは、望むべくもありません。

自動車の道路網ですが、サンパウロ州やミナスジェライス州のそれはドイツのアウトバーンも及ばない素晴らしい発展振りです。多分、奥地でも、アマゾンの流域でも開発が進んでいるのでしょう。

近年稼働し始めたオサム・ウツミ鉱山のウランの採鉱及び製錬の施設の理論的な完全さには目をみはる他はありません。しかし、そこで採れる鉱石の性質にどれだけ合っているかは疑問ですが。

たった1か月の滞在では、体験できる事象の数はいくつもありますが、お金の無駄使いとしか思えないものに沢山出会います。民度の最も高い地域でそうなのですから、開発途上地域ではなお多いでしょう。北米を主とする外資を必要以上に導入しているのだと思います。

結局、教条的な言い方になりますが、「ブラジルの南部諸州の豊かな生産は北米を主とする外資に収奪されている。」なのでしょう。それでは、外

資はどうやって過剰な投資を実現しているのでしょうか。北米の資本家がいやがるブラジル人を掴まえて、もっと借りるように強制しているという図式は成立するのでしょうか。

奴隷商人

強力な武器を携えた白人が、温順な黒人の住む所に攻めて行き掴まえて奴隷にすることができるのでしょうか。ごく短期間なら可能でしょう。ローマ帝国の版図の拡大期ならそんなこともあったかも知れません。しかし、黒人奴隷の供給が長続きするのは、黒人が黒人を狩り立てて商人に売却する供給態勢が整備されている場合のみでしょう。

産業を重視する南部の人々ではなく、政治のみに着目する北部のエリートが連邦政府を支配していることを述べましたが、その人達が外国資本の過剰借入の継続を歓迎しているとしか考えられません。今年の春（ブラジルでは秋）いきなり外債の利払停止の宣言などがありました。これは、大統領が与党の第1党に属していないことなどの政情の反映に過ぎず、外資に依存する姿勢とは関係ありません。

さて、クルザード（あるいはクルゼイロ）の切下げの問題に戻ります。通常の徴税手段では生産者や消費者からある限度以上には回収できませんから、南部からお金を吸いあげて一部を福祉にばらまき一部を北部に注ぎ込み、残りは莫大な利払に当てるのが経常的に行われる為の特別な機構が存在するはず。そのからくりが「物価騰貴」だと思います。もしも物価水準を一定に保てば、無産者の中のあるものは賃金の貯蓄により中流に移行するものが出てくるでしょう。中流の者でも、頭脳労働者を始めとする給料生活者が通貨の形のまま貯蓄を行ない財産を形成することができます。物価騰貴は、本来なら集積される筈の財を無価値なものに変える最も有効な手段であります。連邦政府の要人はこの手段を意識的に用いてブラジル経済を外資に売りながら自己の権益を擁護しているようです。

先進諸州が発展途上諸州と連邦を形成しているかぎり、この状態から脱却するのがむづかしいのかも知れません。

地球の裏側

以上、勝手なことを書きました。地球の裏側の事情はごく僅かしか知らないので議論を展開するのが容易でした。本当は我国の政治や経済が論じられれば良いのですが、日本については余りに多くの事柄を知っているので、都合の良い事象だけを引用するという社会科学者の常套手段を使わない限り議論を進められないので諦めています。ただし、本稿の所論の肝腎な部分は、かつて日本で所得倍増計画なるものが進行していた当時、既に名誉教授になって居られた坪井誠太郎先生（地質学）が言われたことの焼き直しであることを告白致します。

終りに当って、サンパウロの東洋人街で御馳走してくださった上、素人の書生論を笑って聞き流して下さった江頭稔教授（国土館大学経済学部）と、広報への投稿を強制された田賀井篤平編集委員長に御礼申し上げます。